

「いざという時のために」

青森県 外ヶ浜町立三厩小学校 六年 唐牛 海輝

ぼくたちが住む日本は、自然災害に見舞われやすい国です。梅雨の時期には集中豪雨、夏から秋にかけては台風、そして一年中地震が起こるなど、常に自然災害の危険ととなり合わせの生活を送っています。そういった自然災害についてイメージすると、どうしても災害そのものの被害に目がいきがちですが、そこから引き起こされる二次災害についても、目を向けていかなければならないとぼくは感じています。その二次災害の一つが、土砂災害です。ぼくはこれまで、自然災害がもたらす被害やその備えについて、よく知っているつもりでいました。しかし、ぼくが知っている情報は一次災害のことばかりで、土砂災害のような二次災害には目を向けていなかったのです。そのことに気づいたのは、実際に土砂災害の恐ろしさを身近に感じたときのことでした。

それは、2年前の夏のことです。ぼくが住む三厩地域全体に、数日間にわたって大雨が降り続けました。そんな中、

「大雨による土砂災害の危険性が高まっています。」

というアナウンスが、突然テレビから流れてきました。今なら、「すぐに避難しないといけない」と思いますが、当時のぼくはそんな危機感を全く感じていませんでした。それは、土砂災害のことを何も理解していなかったからです。自然災害が多い日本だからこそ、その備えも万全だと思込み、油断していたのかもしれませんが。また、雨足もだんだん弱まってきているように感じていたので、「まあ、なんとかなるでしょ」くらいの気持ちでいました。

幸いなことに、このときぼくや家族、家に被害はありませんでした。「やっぱり大したことないじゃん」と、そう思い始めていましたが、翌日に友達の話聞いたとき、この考えは大きな間違いであることに気づきました。道路の一部が崩壊し、トンネルがふさがれてしまったこと。海にたくさん土砂が流れ込み、暗くにごってしまっていること。がけ崩れによって、押しつぶされてしまった家があること。住む場所を失い、避難所生活を送っている方がいること。とても現実とは思えないような話を、たくさん耳にしました。ここで初めて、自分の楽観的な考えが恥ずかしく感じたのと同時に、もっと真剣に土砂災害のような二次災害とも向き合っていかなければならないのだと感じました。

土砂災害の恐ろしさを目の当たりにしたことで、いざという時のために、日頃から備えをしておくことがとても重要だと考えるようになりました。しかし、ぼくは土砂災害とは具体的にどういう災害なのかすら理解していなかったため、まずは災害が起こる原因や仕組みについて学ぶところから始めました。それを理解した上で、地域の自然環境や地形に応じた適切な対策を考え、実行することが必要なのだと思います。普段から地域の地形や危険箇所を知り、災害が起こった時の避難場所や経路を把握すること、また家族や地域の人々と協力して、避難訓練を定期的に行うことで、混乱した状況でも冷静に行動できるようになることが大切なのだと感じました。

さらに、災害が発生する前には、気象情報や地盤の状態などを注意深くチェックし、その危険性を事前に予測しておくことが予防策として効果的であることを学びました。地域が提供している防災情報や災害対策マニュアルを活用し、自分たちの安全を守るための備えを怠らないことが大切だと知りました。

この経験から、土砂災害は突然やってくる自然の脅威であると同時に、事前の備えが命を守るために大切であることを学びました。土砂災害は恐ろしいけれど、正しい知識と対策があれば、被害を抑えることができます。地域の人々と協力し、地域全体で防災意識を高めることが、将来的に災害から身を守るための第一歩なのだと思います。だからこそぼくは、これからも地域社会と連携し、災害に強い地域の実現に向けて、行動を続けていきたいと思っています。そしてぼくのこの経験が、多くの方にとって土砂災害への備えについて考えるきっかけとなればいいなと願っています。